



Title	天理大学附属天理図書館所蔵「松前ノ言」について (1)
Author(s)	佐藤, 知己
Citation	北海道大學文學部紀要, 46(3), 41-64
Issue Date	1998-03-31
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/33706">http://hdl.handle.net/2115/33706</a>
Type	bulletin (article)
File Information	46(3)_PL41-64.pdf



[Instructions for use](#)

## 天理大学付属天理図書館所蔵「松前ノ言」について(1)<sup>1)</sup>

佐藤 知己

### 0. はじめに

天理大学付属天理図書館に「松前ノ言」と題された写本が所蔵されている。この写本はアイヌ語・日本語の対訳語彙集であり、金田一(1924)の研究により、アイヌ語を記録した最も古い文献の一つであるとされている。また、この文献における仮名の用字法、アイヌ語の特徴等の諸点についても、主要な点については金田一によって既にかかなりの程度明らかにされていると言ってよい。しかしながら、その後、金田一の「自筆筆写本」の影印が1972年に出版されたものの、原本そのものの所在が永く一般に知られなかったこともあり、金田一の研究を再検討し、この写本についてさらに考察を加えた研究はないようである。このたび、機会を得て、実際に現物にあたってみると、翻字に関してもわずかながら金田一の解釈とは別の解釈の可能な例も見いだされ、また、金田一が不明とした例についても、用字法等の再検討から解釈が可能と思われるものも若干あるようである。また、アイヌ語を記した文献の中でも最古に属するというこの文献の性格と、金田一以後のアイヌ語学の発達を考慮すれば、やはり、この文献について全般的な再検討が必要な時期に来ているのではないかと思われる。

### 1. 文献的特徴

「松前ノ言」は、既に述べたように天理大学付属天理図書館の所蔵本(080、

イ 21, 180) であるが、天理図書館 (編) (1960: 10-19) によれば、かつては歌人佐佐木信綱の蔵書であった「國籍類書」(268 冊) 中の一冊 (第 180 冊) であるという。佐佐木 (1925) による本書の解題は以下の如くである。

三十七 松前ノ言 原寸大 蝴蝶装 八半本 一帖 伊勢亀山石川家の  
 舊蔵にして國籍類書と名づけ、黒塗の箱二箱に収めたる旅行用小形の本  
 百三十一種 二百八十帖現存せり の一つなり。そは概ね寛永年間の書寫  
 にかかり、各種の書をあつめたる叢書としても、時代古きものに属す。し  
 かして、明治廿年、美作鶴田松平家の有となれりしをもて、同家の蔵書印  
 を捺したり。松前の言一帖二十四葉は、アイヌ語の辭書として現存せる最  
 古のものたること、金田一氏の「世界最古の蝦夷語彙」心の花廿八卷四號  
 所載に審なり。(一部字体を改めた。)

本書の書誌的な解説は以上にほぼ尽きており、書誌学を専門とするものではない筆者が今更つけ加えるべきものは何もないと言えよう。しかし、蛇足を承知で外形その他について実地に観察し得た点を若干述べたい。すなわち、この写本は縦 11.5 cm, 横 9 cm の極めて小型の写本で、紙片を束ねて中央で綴じた冊子に書かれている。天理大学付属天理図書館 (編) (1996: 18) では綴葉装と述べている。詳細は確認困難であるが、綴じ方についてなお一言すれば、表紙の用紙の左端をわずかに折り、それを 14 丁表の右端に糊付けし、6 丁裏と 7 丁表の中央に上下二つの穴を開けて糸を通し、19 丁裏で縛って綴じてある。表紙、裏表紙には金箔様のものが散らされているが、一部剝離している。表紙の左に「松前ノ言」と外題が縦書きで記されている。序、跋等の著者や年代の手がかりとなるものは何も記されていない。佐佐木の解題にある元の所蔵者の「伊勢亀山石川家」と本書との関係も、現時点ではやはり何も明らかでない。従って、本書の正確な成立年代はやはり不明であるが、佐佐木も述べているように、同じ箱の他の文書の中で書写年代の明らかなものは寛永年間 (1624-1644) か、それ以前のものしかない (天理図書館 1960) ので、本書が少なくともその頃の書写である可能性は少なくないと思われる。

本文の料紙はやや茶色を帯びているが、光沢を帯びて滑らかであり、恐らく雁皮紙と思われる。料紙の縁にけば立ちはなく、鋭利な刃物で切られたものと思われる。非常に小型であるところから、元からこの版型であったのかどうか、疑問なしとしない。事実、1丁表の「ゑ」の左端が切れているように見え、後からの裁断によるものである可能性もある。もっとも、他にこのような箇所はなく、裁断による改装が行われたかどうかはなお問題であると思われる。

本文は、まず上部にアイヌ語が平仮名、変体仮名で書かれ、その下に日本語の訳語が書かれている。これは、江戸後期のアイヌ語資料が、アイヌ語に関する限り片仮名を用いる場合が圧倒的に多いのとは対照的である。なお、前半(8裏、「なせ者らた川と言事」まで)の日本語訳語が「……といふ事」という形式であるのに対し、それ以降が「……の事」という形式になっているのは、明らかに句・文と単語を部類分けする意図があったことを示しており、分量は僅かであるが、本書が一定の意図と体系をもって編集されたことを示すものと言える。用字上の特色については以下で詳しく述べるが、注目されるのは日本語の表記に濁点「<sup>◌</sup>」(半濁点でなく)が使われた例が三例(「本<sup>◌</sup>うし」、「わらん遍<sup>◌</sup>」、「志んだ」)、アイヌ語の表記に使われた濁点の例が六例(「本<sup>◌</sup>ろ」、「志やら遍<sup>◌</sup>」、「たぐう」、「びる可」、「び志<sup>◌</sup>」、「ゑとぶ」)あることである。これらの「濁点」が真実何を表しているのかは依然問題としなければならないが、影印本では明確でなかったこれらのある種の「点」が、原本ではすべて濁点と見なし得るものであることが判明したのは注目に値すると思われる。

## 2. 言語的特徴

### 2.1. 訳語の表記

本稿の主たる目的は、採録されたアイヌ語の検討にあるが、そのためには、まず、アイヌ語の表記に用いられている仮名の用法を明らかにすることが重要である。しかし、仮名の用法は時代差、地方差、個人差があると思われ、

慎重な取り扱いが必要である。従って、まず音韻史が比較的良好にわかっている日本語側の表記方法を明らかにし、それを手がかりとしてアイヌ語の表記を考察するのが妥当な方法であると思われる。とはいえ、筆者はもとより日本語音韻史の専門家でなく、いわば必要に迫られてのことであり、大方の御叱正を乞う次第である。なお、既に述べたように、本書の成立年代は厳密には不明であるが、料紙、形式などの特徴から、一応、17世紀初期のものと仮定して作業を進めることにする。従って以下、室町末期から江戸初期にかけての日本語の音韻、文法体系を念頭において訳語の表記を検討することにする。

「あ」の例：

あきなひ（「商い」1表），あしき（「悪しき」2表，9表），ある（「有る」2裏），あ川ひもの（「厚い物」4表），あめ（「雨」15表），あた満（「頭」15裏），あし（「足」16裏）

16世紀末の日本語においても「あ」は大体现在と同様と推定されているので（橋本1961：244），例からみて，この場合においても，「あ」は[a]のような音を表したものとみて問題ないであろう。

「い」の例：

いふ（「言ふ」1表，1裏，2表，2裏，3表，3裏，4表，4裏，5表，5裏，6表，7表，7裏，8表，8裏，総数37例），いない（「無い」2表），いほしい（「欲しい」6表），いんふるい（「絹布類」10表），いめんるい（「木綿類」10裏），いそかし（「忙し」6表），いささき（「小さき（ちひさき）」6裏，10裏），いさ（「いざ（問投詞）」6裏），いまかけ（「前かけ」13裏），いま（「今」7表），いや（「嫌」3表），いつ連も（「いづれも」19表），いち王（「一把」20表），いち杯（「一杯」20表）

「い」も今日と大体同じ発音であったと言われている(橋本 1961: 244)ので、それに従う。ただし、「前かけ」を「まへかけ」でなく、「まい可け」としているのは、あるいは筆者の方言を反映しているものかもしれない<sup>2)</sup>。また、後に述べるように、命令形「来い」に該当する語形を「こゑ」と表記した例、「添えよ」を「そいよ」と表記した例もある。しかし、これらの他にはイ段とエ段を混同したと思われる例が見あたらないので、可能性はあるものの、筆者がこれらの段の音の区別ができなかったとまでは言い切れないであろう。また、「ちいさき」のような例において、「ちい」は長母音ではなく、母音連続であった可能性がある(橋本 1961: 253)。なお、「ちひさき」を「ちいさき」と書いているのは、筆者が伝統的な仮名遣いに習熟していないことを思わせる。

「う」の例：

さんせう (「参しよう?」5裏)、かうし (「麴(カウジ)」9裏)、本うし (「帽子」13裏)、うそ (「嘘」7裏)、うつけ (「虚け」8裏)、あきなひ志やう (「商いしよう(アキナヒシヤウ?)」1表)、とり可へさう (「取り返そう(トリカヘサウ)」3表)、談合せう (「談合しよう(談合セウ?)」5表)、うる (「売る」7表)、う寿ひ (「薄い(ウスイ)」4表)

ア段の仮名の後に「ウ」が来た場合、16世紀末においてはこれらは「開音のオ」([o:])を含む音節であったとされている(橋本 1961: 255)。上の例の「かう」、「さう」、「やう」が開音のオを含んだものだったかどうかは問題であるが、少なくともこのような表記は長音を表したものと言ってよいであろう。これに対し、「談合せう」のようにエ段の仮名の後に「ウ」が来た場合には「合音のオ」([o:])を含む音節であったとされる(橋本 1961: 255)。従って、「せう」は [so:] のような発音を表したものとみられる<sup>3)</sup>。

「お」の例：

おとこ（「男（ヲトコ）」11裏）、おひ（「帯」10裏）

16世紀末には、「お」は wo に近かったと言われている（橋本 1961：244）。このことは本書の用字法を考える際にも一応考慮しておくべきものと考えられる。

「越（オ）」の例：

越（「を（助詞）」5表）

「お」について述べたことは恐らく「越」についてもあてはまると思われる。なお、この一例しかなく、「越」で特にワ行の「ヲ」を表した可能性については何とも言えないであろう。ちなみに、本書では日本語、アイヌ語の表記いづれにおいても「を」は全く使用されていない。他の江戸時代のアイヌ語資料、特に後期のものにおいては逆に「オ」が全く使用されず、もっぱらワ行の「ヲ」のみが使用されるのとは著しい対照をなしている（佐藤 1995）。

「か」の例：

かうし（「麴（カウジ）」9裏）、いそかし（「忙し」6表）、かそへ（「数え（かぞへ）」19表）、か王ひ（「かわいい（カハイイ）」4裏）

16世紀末においては、「か」はやはり [ka] のような音であったが、濁音の場合には前の母音に鼻音化があったという（橋本 1961：244-5）。「いそかし」は『日葡辞書』では Isogaxij とあるので、この「か」も恐らく濁音であったと思われる。従って、「か」は濁音も表したと考えて良いであろう。

「可(カ)」の例：

まい可け(「前掛け」13裏)，可せ(「風(かぜ)」14裏)，可たしけなき(「忝なき」1裏)，可たな(「刀」13表)，さ可つき(「杯」16裏)，た可ひ(「高い」2裏)，ち可ひ(「近い」3裏)，みし可ひ(「短い」4表)，とり可へさう(「取り返そう」3表)，可ま(「釜？、鎌？」10表)，可らさけ(「乾鮭」14裏)，者可り(「ばかり」7裏)

「可」も「か」と同様 [ka] のような音であったろう。なお、濁音を表した「可」はないようであるが、これが意図的なものかどうかは何とも言えない。

「き」の例：

可たしけなき(「忝なき」1裏)，久しき(1裏)，あきなひ(「商ひ」1表)，つき(「月」10表)，者、き(「帚」13表)，ちいさき(「小さき(チヒサキ)」6裏，10裏)，きれ多る(「切れたる」4裏)，あしき(「悪しき」2表，9表)，よき(「良き」2表，8裏)，よき(「斧」9裏)，さ可つき(「杯(サカヅキ)」16裏)，ちやうき(「重器？」17表)

「き」は [ki] のような音であったとしてよいであろう(橋本1961:244)。

「く」の例：

志やくし(「杓子」12表)，くし(「櫛」12裏)，くしら(「鯨(クヂラ)」14表)，つくなひ(「償い(ツグナヒ)」8表)，くらひ(「暗い」3裏)

「く」も [ku] のような音であったとしてよいであろう(橋本1961:244)。「つくなひ」は濁音の例ともみられるが、『日葡辞書』によると「償い」は Tçucunoi で、「く」は清音である。また、語形も違っているのは注目される。



「け」の例：

ゆけ（「行け」5表），うつけ（「虚け」8裏），可たしけなき（「忝なき」1裏），さけ（「酒」9表），まい可け（「前掛け」13裏），け（「毛」15裏），可らさけ（「乾鮭」14裏），た者け（「戯け（タハケ）」8裏）

「け」も [ke] のような音であったとしてよいであろう（橋本1961：244）。

「遣（ケ）」の例：

遣んふ（「絹布」10表）

一例しかないが、「遣」も [ke] のような音であったろう。

「こ」の例：

こ、（「此処」1表），すこし（「少し」7表），満こと（「真」7裏），この（「此の」19表），おとこ（「男」11裏），まなこ（「眼」16表），にこり（「濁り」9表），これ（「此れ」7裏），こゑ（「来い」1表），そこ（「其処」5表）

「こ」も [ko] のような音であったろう（橋本1961：244）。ただし、「にこり」は『日葡辞書』でも Nigori とあるので、この「こ」は濁音を表した例とみられる。

「さ」の例：

とり可へさう（「取り返そう（トリカヘサウ）」3表），さ可つき（「杯（サヅキ）」16裏），ちいさき（「小さき（チヒサキ）」6裏，10裏），さけ（「酒」9表），可らさけ（「乾鮭」14裏），いさ（「いざ？」6裏），さんせう（「参し

よう？」5裏)

「さ」は [sa] のような音であったとしてよいであろう (橋本 1961 : 245)。恐らく濁音も表したと思われる。

「し」の例：

本しい (「欲しい」6表)、みし可ひ (「短い (ミジカイ)」4表)、久しき (「久しき」1裏)、あしき (「悪しき」2表, 9表)、可たしけなき (「忝なき (カタジケナキ)」1裏)、すこし (「少し」7表)、いそかし (「忙し」6表)、王し (「鷲」16裏)、あし (「足」16裏)、かうし (「麴 (カウジ)」9裏)、くし (「櫛」12裏)、志やくし (「杓子」12表)、本し (「星」15裏)、本うし (「帽子 (?)」13裏)、くしら (「鯨 (クヂラ)」14表)、めし (「飯」9表)

「し」は shi [ʃi] のような音であったであろう (橋本 1961 : 245)。もっとも、「かうし」、「くしら」は『日葡辞書』では Cōji, Cujira であるので、この「し」は濁音を表したものとみられる。なお、「し」はすべて語中、語末に用いられた例しかないが、何らかの意図をもって行われたものかどうかはわからない。

「志 (シ)」の例：

志やう (「しよう」1表)、志やくし (「杓子」12表)、志らぬ (「知らぬ」2表)、志んだ (「死んだ」8表)、に志ん (「鯡」14表)

「志」も「し」と同じく [ʃi] のような音であったであろう。

「す」の例：

すこし (「少し」7表)

「す」は [su] のような音であったであろう (橋本 1961 : 245)。

「寿 (ス)」の例：

や寿ひ (「安い」2裏), う寿い (「薄い」4表)

「寿」も [su] のような音であったろう。

「せ」の例：

さんせう (「算しよう (?)」5裏), 談合せう (「談合しよう」5表), なせ  
(「なぜ」4裏, 8裏), ミせろ (「見せろ」1表), 可せ (「風」14裏)

「せ」は16世紀末には she [ʃe] であったと言われている (橋本 1961 : 245)。濁音もゼではなく、ジェであったらしい (橋本 1961 : 246)。しかし、同じ頃、関東地方では se であったと言われており (松村 1977 : 90)、本書の「せ」がいずれの発音に近いかは問題であろう。なお、「せう」は「う」の項で述べたように、[ʃo:] のような音であったろう。

「そ」の例：

いそかし (「忙し」6表), そこ (「其処」5表), うそ (「嘘」7裏), そな  
た (「其方」5表), そふ多 (「添うた」7表), かそへ (「教え」19表)

「そ」は [so] のような音であったろう (橋本 1961 : 245)。

「た」の例：

た可ひ (「高い」2裏), た者け (「戯け」8裏), 者らた川 (「腹立つ」8裏)

「た」は [ta] のような音であったろう (橋本 1961 : 246)。

「多 (タ)」の例：

可多しけなき (「忝なき」1 裏), きれ多る (「切れたる」4 裏), そな多 (「其方」5 表), そふ多 (「添うた」7 表), 可多な (「刀」13 表), あ多満 (「頭」15 裏)

「多」も [ta] のような音であったろう。なお, 「多」は語中, 語末に用いられた例しかない。

「だ」の例：

志んだ (「死んだ」8 表)

濁音の [da] に濁点を施した「だ」を用いている。濁点を用いた例が少ない (日本語表記に三例, アイヌ語表記に六例) ことから考えると注目すべき例と言える。

「ち」の例：

ちいさき (「小さき」6 裏, 10 裏), ち可ひ (「近い」3 裏), 乃ち (「後」1 裏), ちやうき (「重器 (?)」17 表), いち王 (「一束 (?)」20 表)

「ち」は tshi ([tʃi]) であったと言われている (橋本 1961 : 246-7)。なお, 「ちやうき」は, どのような語か比定が難しいが, 国字本『どちりなきりしたん』に, 「聴聞」を「ちやうもん」と書いた例が存し, その語が『日葡辞書』では Choōmon と書かれていることよりみて, 「ちやう」が少なくとも長音を表した可能性はあると思われる。金田一 (1924 : 48) はこの語を不明として

いるが、ここでは以上のようなことを考慮して、一案として「重器」（『広辞苑』による）に比定した。なお、『日葡辞書』の諸例では「重」は「合音」であって「開音」ではないので、なお問題は残る。

「つ」の例：

さ可つき（「杯（サカツキ）」16裏）、つき（「月」10表）、つくなひ（「償（ツグナヒ）」8表）、うつけ（「虚け」8裏）、つ者（「鏝」13表）、いつ連（「いづれ」19表）

「つ」は [tsu] として良いであろう（橋本 1961 : 247）。なお、濁音は [dzu] であったらしい（橋本 1961 : 248-9）。

「ツ」の例：

十ツ（「十ツ」18裏）

この例は「十ツ」とも「十ヲ」とも読めるので一応ここにあげてある。しかし、カタカナの「ツ」、「ヲ」の例が他にないので決め手がない。むしろ、数え上げの場合により一般的と思われる「とお」という語形を表したものとして「ヲ」と読むべきものかもしれない。

「川（ツ）」の例：

川（「つ（接尾語）」17表、17裏、18表、18裏、総数9例）、た川（「立つ」8裏）、あ川ひ（「厚い」4表）

「川」も「つ」と同様に考えてよいであろう。なお、「一つ」におけるような接尾語に用いた例が圧倒的に多く、日本語の表記に用いた例は2例しかない

いのに対し、後に述べるようにアイヌ語の表記には非常にたくさん用いられているのは注目される。

「て」の例：

て、「父」11表), まで («待て」3表), 取り合て («取り合って」6表)

「て」は [te] と考えてよいようである (橋本 1961 : 247)。なお、その前に促音があった場合もあると思われる。

「と」の例：

満こと («真」7裏), と (引用の助詞, 1表~8裏, 40例), おとこ («男(ヲトコ)」11裏), ひとひろ («一尋」20表), やと («宿」6裏), とり可へさう («取り返そう」3表), とをひ («遠い(トホイ)」3裏), とをり («通り(トホリ)」19表)

「と」は [to] と考えてよいようである (橋本 1961 : 247)。濁音を表した場合もあったであろう。

「な」の例：

あきなひ («商(アキナヒ)」1表), なき («無き」1裏), ない («無い」2表), か王ひな («かわいいな」4裏), なせ («なぜ」4裏, 8裏), そな多 («其方」5表), 大なる (6裏), な尔 («何」7表), ミな («皆」8表), つくなひ («償い」8表), なへ («鍋」12表), 可たな («刀」13表), まなこ («眼」16表), 者な («鼻」16表)

「な」は [na] としてよいであろう (馬淵 1982 : 108)。

「に」の例：

にこりさけ（「濁り酒」9表）、に志ん（「鮓」14表）

「に」も [ni] としてよいであろう（馬淵1982：108）。

「尔（ニ）」の例：

な尔（「何」7表）、尔（「に（助詞）」4裏，19表）

「尔」も [ni] としてよいであろう。

「ぬ」の例：

志らぬ（「知らぬ」2表）

「ぬ」も [nu] のような音として良いであろう（馬淵1982：108）。

「年（ネ）」の例：

ふ年（「舟」14裏）

「年」は一例しかないが，[ne] を表したものとみてよいであろう（馬淵1982：108）。

「の」の例：

の（助詞，1裏，4表，4裏，6裏，9表，9裏，10表，10裏，11表，11裏，12表，12裏，13表，13裏，14表，15表，15裏，16表，16裏，17表，

17 裏, 18 表, 19 表, 19 裏, 20 表, 総数 48 例)

「の」は [no] としてよいであろう (馬淵 1982 : 108)。以下の「乃」, 「之」についても同様と考えられる。

「乃 (ノ)」の例:

乃ち (「後」1 裏), 乃 (「の (助詞)」6 裏, 8 裏, 9 表, 9 裏, 10 表, 11 表, 11 裏, 12 表, 14 裏, 15 表, 16 表, 18 表, 18 裏, 19 表, 総数 21 例)

「之 (ノ)」の例:

之 (「の (助詞)」9 裏)

「者 (ハ)」の例:

者 (「は (助詞)」5 裏), 者可り (「ばかり」7 裏), た者け (「戯け」8 裏), 者ら (「腹」8 裏), 者り (「針」12 裏), 者ゝき (「箒」13 表), つ者 (「鐙」13 表), 者な (「鼻」16 表), 王しの者 (「鶯の羽」16 裏), 壺者い (「一杯」20 表)

語頭の「は」は 16 世紀末にはまだ唇音であったと考えられている (橋本 1961 : 249-251)。しかし, 寛文 (1661-1673) 頃の京都の方言, 享保 (1716-1736) 頃の江戸の方言では既に h になっていたという指摘もあり (有坂 1938 : 233-4), 問題がある。また, 『日葡辞書』の Ippai (一杯), Fauaqigui (箒木), Tauaqe (戯け), Bacari (ばかり) のような例から, 「は」は [pa], [ba], [wa] を表す場合もあるようである。



「ひ」の例：

くらひ（「暗い」3裏），た可ひ（「高い」2裏），ち可ひ（「近い」3裏），  
つくなひ（「償い（ツグナヒ）8表），とをひ（「遠い」3裏），みし可ひ（「短  
い」4表），や寿ひ（「安い」2裏），ひとひろ（「一尋」20表），あきなひ（「商  
い（アキナヒ）1表」

『日葡辞書』では、「暗い」は Curai であるので、これら形容詞の終止形の  
「ひ」はやはり [i] であろう。伝統的な仮名遣いに従っていない例と言える。  
また、「商」は Aqinai と書かれており、この「ひ」も [i] を表したものであ  
ろう。これに対し、「一尋」は Fitofiro であるので、この場合は「ひ」は [ɸi]  
または [hi] であったろう。

「ふ」の例：

そふ多（「添うた」7表），遣んふ（「絹布」10表），ふ年（「舟」14裏），ふ  
る（「降る」15表），いふ（「言う（イフ）1表，1裏，2表，2裏，3表，3  
裏，4表，4裏，5表，5裏，6表，7表，7裏，8表，8裏，総数37例

「ふ」の場合も「ひ」の場合と平行的に考えてよいと思われる。すなわち，  
[ɸu]，[pu] のような音を表していると思われる。なお、「そふ多」の場合は  
o の長音（合音）、「いふ」の場合は u の長音であったと思われる。

「へ」の例：

へ（「へ（助詞）」1表，6裏），とり可へ（「取り替え（トリカへ）3表」），  
ゆへ（「故（ユエ）」5裏），なへ（「鍋」12表），かそへ（「数え（カゾへ）」19  
表）

「なへ」の「へ」は濁音 [be] をとみて良いであろう。他の「へ」は『日葡辞書』では ye と表記されているが、18 世紀初頭の朝鮮関係資料でも ye を表したと考えられる例が見られるという (松村 1977 : 88)。

「遍 (べ)」の例：

わらん遍 (「童」11 表)

『日葡辞書』には Varabe とならんで、Varambe という形がみられる。

「本 (ホ)」、「本」 の例：

本しい (「欲しい」6 表)、本し (「星」15 裏)、本うし (「帽子」13 裏)

「ほ」は [ho] または [Φo] であったろう。また、『日葡辞書』で「帽子」は Bôxi であるので、「本<sup>々</sup>う」は長音であったろう。

「ま」の例：

まい可け (「前掛け」13 裏)、いま (「今」7 表)、まて (「待て」3 表)、まなこ (「眼」16 表)、可ま (「鎌？」10 表)

「ま」、「満」 は共に [ma] のような音とみてよいだろう (馬淵 1982 : 108)。

「満 (マ)」の例：

満こと (「真」7 裏)、あ多満 (「頭」15 裏)

「み」の例：

み、（「耳」16表）、みし可ひ（「短い」4表）

「み」、「ミ」は共に [mi] としてよいであろう（馬淵 1982：108）。

「ミ」の例：

ミせろ（「見せろ」1表）、ミな（「皆」8表）

「め」の例：

めし（「飯」9表）、あめ（「雨」15表）、毛めん（「木綿」10裏）

「め」は [me] としてよいであろう（馬淵 1982：108）。

「も」の例：

も（「も（助詞）」19表）、もの（「物」4表、4裏、6裏）

「も」、「毛」はともに [mo] としてよいであろう（馬淵 1982：108）。

「毛（モ）」の例：

毛めん（「木綿」10裏）

「や」の例：

志やう（「しよう」1表）、志やくし（「杓子」12表）、ちやうき（「重器？」）

17表), いや(「嫌」3表), やと(「宿」6裏), や寿ひ(「安い」2裏)

「志やう」, 「ちやうき」については「う」の項を参照。「志や」は今日の「しゃ」のような音であつたらしい(橋本1961:260)。その他の「や」は[ja]としてよいであろう(馬淵1982:108)。

「ゆ」の例:

ゆけ(「行け」5表), ゆへ(「故(ユエ)」5裏), ゆ(「湯」12表)

これらの「ゆ」も[ju]としてよいと思われる(馬淵1982:108)。

「よ」の例:

よき(「良き」2表, 8裏), よき(「斧」9裏), そいよ(「添えよ」7表)

「よ」は[jo]としてよいであろう(馬淵1982:108)。

「ら」の例:

可らさけ(「干鮭」14裏), 者ら(「腹」8裏), 志らぬ(「知らぬ」2表),  
くら(「鯨」14表), くらひ(「暗い」3裏), わらん遍(「童」11表)

「ら」は[ra]としてよいであろう(馬淵1982:108)。

「り」の例:

とり可へ(「取り替え」3表), にこりさけ(「濁り酒」9表), 者可り(「ばかり」7裏), 者り(「針」12裏), とをり(「通り(トホリ)」19表)

「り」は [ri] としてよいであろう (馬淵 1982 : 108)。

「る」の例：

うる (「売る」7表), るい (「類」10表, 10裏), ある (「有る」2裏), きれ多る (「切れたる」4裏), ふる (「降る?」15表), 大なる (「大なる (オホイナル?)」6裏)

「る」は [ru] としてよいであろう (馬淵 1982 : 108)。

「れ」の例：

きれ多る (「切れたる」4裏), これ (「是れ」7裏)

「れ」, 「連」は [re] としてよいであろう (馬淵 1982 : 108)。

「連 (レ)」の例：

いつ連 (「いづれ (イツレ)」19表)

「ろ」の例：

みせろ (「見せろ」1表), ひろ (「尋」20表)

「ろ」は [ro] としてよいであろう (馬淵 1982 : 108)。

「わ」の例：

わらん遍 (「童」11表)

「わ」、「王」は [wa] としてよいであろう (馬淵 1982: 108)。

「王 (ワ)」の例:

王しのは (「鷺の羽」16裏), いち王 (「一羽 (イチハ)」20表), か王ひな (「可愛いな」4裏)

「ゑ」の例:

こゑ (「来い」1表), ゑ (「へ (助詞)」1表)

カ行変格活用の動詞の命令形は、江戸前期には「こよ」と並んで、「こい」という形が生まれていたという (松村 1977: 128)。従って、「ゑ」が [i] のような音を表した例と見ることもできるかもしれない。また、「ゑ」は [je] である可能性もある (橋本 1961: 244)。

「ヲ」の例:

十ヲ (「十」18裏)

『日葡辞書』では Touo であり、[wo] であった可能性がある。もっとも、この例は「ツ」とみることでもできる。

「ん」の例:

さんせう (「参しよう?」5裏), 志んだ (「死んだ」8表), に志ん (「鯉」14表), 遣んふ (「絹布」10表), 毛めん (「木綿」10裏), わらん遍 (「童」11表)

撥音「ん」は現在と同じく環境によって様々な鼻音的要素を表したと思われる(橋本 1961: 264-266)。

## 2.2. 訳語の特色

表記の点以外にも訳語には様々な特色が見られる。まず、動詞の活用で注目すべきものとしては命令形があげられる。「そいよ(添えよ)」のように「よ」で終わるものがある一方で、「ミせろ」のように「ろ」で終わるものもある。「よ」は「上方語」であるのに対し、「ろ」は「東国語」の特徴であるとする見解もあり(松村 1977: 128)、両者の混在は注目される。他方、ハ行四段動詞のウ音便とみられる「添うた」という形がみられるが、この場合、「江戸語」では促音便の方が普通であるという(松村 1977: 76)。

形容詞の活用で注目すべきは、終止形と連体形が異なることである。すなわち、終止形は「ない」、「ほしい」、「くらい」、「たかい」、「ちかい」、「とおい」、「みじかい」、「やすい」、「あつい」、「うすい」のように「い」で終わるが、連体形は「かたじけなき」、「ちいさき」、「あしき」、「よき」のように「き」、「しき」で終わる形である。江戸時代では既に現代と同じく終止形、連体形が共に「い」で終わる形であった(松村 1977: 136)という記述もあるので、この文献の一つの特色と言えるかもしれない。なお、「いそがし」という例が一例あり、これを過度期的なものの混入とみるか、やはり長音の「いそがしい」を表したものとみるべきかは問題である。

過去・完了の助動詞にも一種のゆれがみられる。「死にたる」ではなく「死んだ」という形である一方で、「切れた」ではなく、「切れたる」が用いられている。

## 註

- 1) 当初予定の分量を大幅にオーバーしたため、二部に分けて発表する。(1)では日本語に中心を置き、アイヌ語の表記法と特徴については(2)で述べる。なお、本稿の作成には平成9年度文部省科学研究費(奨励研究A、「古文獻に現れたアイヌ語方言の研究」、研究

代表者佐藤知己)の一部を利用した。

- 2) ちなみに、『日葡辞書』では Mayeque としている。
- 3) なお、江戸時代にはサ行変格活用の未然形に意志・推量を表す助動詞「う」が付いた「せう」は、「シ、ヨ一」と発音されることもあったらしい(松村 1977: 117-118)。
- 4) 17世紀初頭にアイヌ語を記録したイエズス会士アンジェリスの記録では、現在 h である音が f で書かれた例がある。faibo「母」(チースリク 1962: (37))。しかし、これは仮名で書かれた資料を当時の宣教師の表記法で翻字したためとも考えられ、必ずしも当時の発音を反映したものではない可能性がある。

## 参考文献

- 有坂秀世. 1938. 「江戸時代中頃に於けるハの頭音について」, 『国語と国文学』  
(『国語音韻史の研究』(第4版), 東京:三省堂, 1968. 221-243.)
- チースリク, H. 1962. 『北方探検記』. 東京:吉川弘文館.
- 橋本進吉. 1961. 『キリシタン教義の研究』. 東京:岩波書店.
- イエズス会(編). 1600. 『どちりな きりしたん』(海老沢有道校訂. 東京:  
岩波書店, 1950.)
- イエズス会(編). 1603. 『日葡辞書』(複製. 東京:岩波書店, 1960.)
- 川瀬一馬. 1971. 『日本書誌學之研究』. 東京:講談社.
- 金田一京助. 1924. 「世界最古の蝦夷語彙——佐々木博士所蔵の『松前の言』  
について」, 『心の花』28-4. (『金田一京助全集』第6巻. 東京:三省堂,  
1993. 40-51.)
- 馬淵和夫. 1982. 『国語音韻論』(第6版). 東京:笠間書院.
- 松村 明. 1977. 『近代の国語——江戸から現代へ』. 東京:桜楓社.
- 中田祝夫(編). 1972. 『講座国語史 第二巻 音韻史・文字史』. 東京:大修  
館書店.
- 佐佐木信綱. 1925. 『百代草』. 東京:私家版.
- . 1939. 『竹柏園蔵書志』. 東京:巖松堂書店.
- 佐藤知己. 1995. 『「蝦夷言いろは引」の研究』(北大言語学研究報告第8号).  
札幌:北海道大学文学部.



天理大学附属天理図書館(編). 1996. 『日本の古辞書』. 天理: 天理大学出版部.

天理図書館(編). 1960. 『天理図書館稀書目録 — 和漢書の部』第三. 天理: 天理図書館.

不詳. 1972. 『松前の言』. 東京: 国書刊行会.

不詳. 「國籍類書目録」. (写本, 一冊. 天理大学附属天理図書館蔵, 081-イニ1).